無意図的想起課題における実験目的への自発的気づき

○森田泰介¹・中田英利子²

(¹東京理科大学理学部第二部 ²大谷大学)

キーワード：無意図的想起，実験目的への気づき，記憶の特性

Spontaneous awareness of the study aim in an involuntary remembering task

Taisuke MORITA¹ and Eriko NAKATA²

(¹Faculty of Science, Division 2, Tokyo University of Science, ²Otani University)

Key Words: Involuntary remembering, Awareness of the study aim, Memory specificity

【目 的】

思い出そうとする意図がないにも関わらず，記憶がふと頭に浮かぶ現象のことを無意図的想起と呼ぶ（小谷津・鈴木・大村, 1992）。これまで無意図的想起を測定する実験事態において実験目的が過去の記憶について調べることにあると実験者が実験参加者に伝えるか否かにより，過去事象の無意図的想起として報告される内容の特性が異なることが示されている（Vannucci et al., 2014）。しかしながら実験参加者が実験目的について実験者から教示されることなく自発的に気づいた場合にも同様の効果が見られるのか，また，実験目的への気づきが想起意図にも影響を及ぼすのかについてはこれまで十分な知見の蓄積がない。そこで，本研究では一般的な無意図的想起の実験課題（雨宮, 2011; 雨宮・関口, 2004, 2006; 雨宮・高・関口, 2011）において，実験目的への気づきが想起意図や想起内容の特性に及ぼす影響について検討する。

【方 法】

参加者 大学生 107 名（女性 25 名，男性 81 名，不明 1 名）が実験に参加した。参加者の年齢の平均は 20 歳（SD=2），範囲は 18-28 歳であった。

刺激 熟知性評定課題用刺激としては雨宮(2011)と同様の 5 項目（“電話”，“友人”，“先生”，“CD”，“写真”）を用いた。また，練習試行用刺激としては雨宮・関口(2004)で用いられた刺激より 1 項目（“外食”）を選定した。

実験材料 A4 判 8 枚からなる冊子が雨宮(2011)や雨宮・関口(2006)を参考にして構成された。1 枚目には性別と年齢に関する質問，熟知性評定課題に関する教示，練習試行用刺激と 5 段階の熟知性評定尺度（“身近な言葉である”－“身近な言葉ではない”）が印刷されていた。2 枚目は無意図的想起を誘発するためのものであり，熟知性評定課題用の刺激 5 項目のうちいずれか 1 項目と，1 枚目と同様の熟知性評定尺度が印刷されていた。3 枚目には雨宮(2011)と同様のフィラー課題（1 桁の数字 5 つを加算するもの）のための刺激が印刷されていた。4 枚目は熟知性評定課題中に経験された想起の有無や，想起内容の特性，想起意図の有無，実験目的への気づきなどについて尋ねるものであった。5 枚目から 8 枚目には RMEEQ（中田・森田, 2014）および日本語版 DES（田辺, 1994）が印刷されていたが，これらは本研究の目的とは無関係なものであるためここでは詳述しない。実験冊子には熟知性評定課題用刺激において異なる 5 種類の冊子が用意された。

手続き 実験は集団で実施され，刺激呈示のタイミングは実験者がストップウォッチにより制御した。雨宮・関口(2004)と同様に，本実験の目的は言葉の身近さを調べるものであることを伝えて 1 枚目の教示を読み上げ，20 秒間の練習試行を実施した。その後，冊子の次のページに進むよう求め，練習試行と同様に 20 秒間で熟知性評定を行うよう教示した。熟知性評定開始後 20 秒が経過した時点で実験者は冊子の次のページ進むよう求め，加算課題を 20 秒間行うよう参加者に教示した。その後，参加者は時間無制限で冊子の 4 枚目から 8 枚

目に印刷された質問に回答した。全ての参加者の回答が終了した時点で，実験参加者は実験目的について詳細な説明を実施した。

【結 果】

熟知性評定課題中の想起と想起意図 参加者 107 名のうち，熟知性評定課題中にこれまでに経験した出来事についての想起を経験しなかったと報告した者は 35 名(33%)であり，経験したと報告した者は 72 名(67%)であった。72 名のうち，想起の際に何かを思い出そうという意図があったと答えた者は 18 名(25%)，意図はなかったと答えた者は 54 名(75%)であった。

実験目的への自発的気づきと想起意図 参加者のうち，本実験が記憶について調べるものであると自発的に気づいていたと報告した者は 42 名(39%)，気づいていなかったと報告した者は 65 名(61%)であった。実験目的への自発的気づきと想起意図との関係を調べるため χ^2 検定を行ったところ（Table 1 参照）有意な結果は認められず（ $\chi^2(1)=0.53, ns$ ）自発的気づきの有無によって想起意図の有無が異なるとはいえなかった。また，これまでに経験した出来事についての想起を報告した参加者 72 名の実験目的への自発的気づきと想起内容の特性との関係を調べるため χ^2 検定を行ったところ（Table 2 参照）有意な結果が認められ（ $\chi^2(1)=4.38, p<.05$ ），実験目的への自発的気づきが報告される場合には想起される記憶内容の特性が高いことが多いことが示された。

【考 察】

本研究の結果より，実験目的への気づきが実験者によって与えられた場合だけでなく，実験参加者が自発的に目的に気づいた場合であっても，気づきが想起内容の特性に影響することが示された。また，実験目的への気づきの有無と想起意図の有無との間に有意な関係が認められなかったことから，実験目的への気づきが無意図的想起を測定する実験を行う上で大きな問題にはならない可能性があると考えられる。

実験目的への気づきが記憶の特性に影響を及ぼすメカニズムには複数のものを想定しうることから（Vannucci et al., 2014），今後はその内実を詳細に検討していく必要がある。

Table 1
Relationship between awareness of the study aim and mode of remembering

Awareness of the aim	Mode of remembering		
	Voluntary	Involuntary	Total
Aware	9 (21%)	33 (79%)	42 (100%)
Unaware	18 (28%)	47 (72%)	65 (100%)

Percentages in brackets.

Table 2
Relationship between awareness of the study aim and memory specificity

Awareness of the aim	Memory specificity		
	High	Low	Total
Aware	20 (61%)	13 (39%)	33 (100%)
Unaware	14 (36%)	25 (64%)	39 (100%)

Percentages in brackets.